

# 渋沢栄一と朝鮮 - 資料紹介

山田 恭子

## 一、はじめに

渋沢栄一は日本の資本主義を作った人として、令和 6 年（2024）から新 1 万円札の肖像として登場する。彼の伝記については『渋沢栄一伝記資料』全 58 巻、別冊全 10 巻<sup>1</sup>をはじめ、おびただしい数にのぼり、その生涯、経営哲学などは広く世に伝えられている。<sup>2</sup>しかし、渋沢が朝鮮経営と関わりが深い人物であったことについては、片桐庸夫「渋沢栄一と朝鮮 - その対朝鮮姿勢を中心として」<sup>3</sup>があるものの、主に『渋沢栄一伝記資料』の一面を捉えたもので、十分に言及されているとは言えない。<sup>4</sup>

そこで本稿では渋沢栄一と朝鮮に関する資料として、次の四つを挙げて紹介する。

資料①西和田久学「仁川に於ける渋沢栄一氏の演説」『日韓通商協会報告』33、日韓通商協会、明治 31 年（1898）5 月。<sup>5</sup>

資料②西和田久学「釜山に於ける渋沢栄一氏の演説の大意」『日韓通商協会報告』35、日韓通商協会、明治 31 年（1898）7 月。

資料③渋沢栄一「朝鮮経営苦心譚」『朝鮮公論』朝鮮公論社、1 巻 1 号、1913、41 ～ 48 頁。

資料④渋沢栄一「征韓論々議の真実を語る」（森田英亮編『あの事件の思出を語る』金星堂、1939、12 ～ 25 頁、国立国会図書館蔵）。<sup>6</sup>

まず、資料①②は、韓国での渋沢栄一の演説を西和田久学<sup>7</sup>がまとめた演説記録である。当時、渋沢は第一銀行支店業務視察のため渡韓しており、仁川と釜山の二大貿易港の土地に於いて日本の積極的な貿易の推進を促している。当時の日本は外国に対しておおむね受身な貿易をしていたのに対し、朝鮮に於いては唯一主動的立場であった。故に武力や外交だけでなく、商業も盛んにしていく事を主張した内容である。

また③④は、朝鮮での通商を盛んにするうえで苦心したこと、明治初期の日朝国交の議案が征韓問題ではなく遣韓使節問題にあったことを伝える渋沢栄一の述懐記録である。これらの記録は当時の日本と朝鮮の関係を示すと同時に、今迄伝えられてこなかった歴史の一面を見る上で、非常に重要なものであろう。そして渋沢栄一の朝鮮での金融・経済方面での活躍、そして当時彼が何を重視していたかを知りうる貴重な機会を与えてくれると確

信している。

## 二、資料①「仁川に於ける洪沢栄一氏の演説」

「仁川に於ける洪沢栄一氏の演説」については以下のとおりである。明治31年（1898）に渡韓<sup>8</sup>した洪沢は韓国皇帝に謁見した後、5月13日に仁川の公園で催された歓迎会で演説を行ない、『朝鮮新報』<sup>9</sup>に掲載された。そしてその内容を転載したと前書きがある。<sup>10</sup>引用文にある傍点は原文のままであり、丸で示される傍点のみ波線で表した。

兼ねて第一銀行支店業務視察の爲め<sup>11</sup>渡韓中なりし同氏は、本月7日を以て韓国皇帝陛下に謁見し十二日を以て、下仁せり、翌日同地公園に於いて紳士の催しに成る歓迎会に臨席し、一場の演説をこころみられし大要は朝鮮新報に依り茲に転載す。然れども固より同志の検閲を経たるものにあらざれば自然誤謬等なきを保し難し。<sup>12</sup>

今般不肖の渡韓に付き諸君が此の盛宴を張りて歓待を忝<sup>かたじけな</sup>ふするは不肖の深く感謝する所なり。而して諸君は不肖に何なりと一席の談話を試みよとの御希望なれど、這回の行いたる素を第一銀行々務視察の爲にして、且つ韓国の地を踏むは今回が始めてなれば来韓後種々の関係よりして、当国に於ける財政及経財事情は多少了知するに至りと雖も、未だ見聞も浅くて敢えて諸君の請聴を汚すべき程の意見もなし、唯最も心に感じたるは当国に於ける貿易の事にして、幸い諸君と爰に相見たるを機とし貿易の本色に就き聊<sup>いささ</sup>か講究を試み度思うなり。

凡そ国会の生存を維持し其発達を期せんと欲せば、貿易を隆盛ならしめざるべからざるは言う迄もなき事なりと雖も、其貿易にも二種あるが如し。一は即ち働き掛けの貿易にして一は即ち受身の貿易なり。而して日本の貿易は二者何れに属する歟と云ふに概論すれば後者即ち受身貿易の状態を免れずと言わざるを得ざるが如し。顧すれば日本が港を開き外国と通商するに至りたるは近く四十年前の事にして、当時米国の水師提督ペリ氏が我国に開港を迫りたる目的は素より通商にあらん、其他英と云ひ、仏と云ひ皆来たりて我と条約を結ぶに至たるは通商を大目的と爲したるに相違なかるべしと雖も、我邦の状態より言えば其開港は通商の爲にあらずして寔<sup>まこと</sup>に政治の爲なりしなり、左れば我が邦の貿易たる常に政治上より誘導さるる事実を有するもの比々然らざるはなし。今二三の例を挙げれば近来著しく進歩せし紡績業の如き、如何にして今日の発達を見たるか云ふに、明治十二三年頃不換紙幣増発の爲め非常に輸入超過<sup>ママ</sup>を見に至り、当時最も多額の輸入を見たるは綿布類にてありたれば、斯く多額の綿布類を輸入されては国家の不利益なりと心付き、我国にても斯業を奨励し、外国品の輸入を防がざるべからずとて之を奨励するに至りたるが、夫が紡績業今日の発達を見

るに至りたる起因にして、航海の事とて亦然り、鉄道とても同様なり、欧米諸国にては航海業は斯く斯くの有様なり。鉄道は斯く斯くの状態なり。故に我が国も斯くせざるべからずと云ふ調子より、政府先ず之が奨励に努め今日に至りたるものにして、要するに我国の通商たる常に政治上の進歩に後ることただ一歩のみにあらざるなり。

以上言ふ如くなれば我国の貿易なるものは、最初は彼輸入し来たりあるに依りて世界の珍奇の産物あるを知り、彼れ購求し去るに依り我の物産に価値あるを知得せりと云ふ有様にて、是れ鎖国の餘弊無理ならぬ事情なしとせざるも今日に至て尚ほ其餘弊を蟬脱する能はず、我れ彼に買はんと欲する所のものは坐して彼の来り売るを待ち、彼我に売らんと欲する所のものはまた彼の来り買ふを待つ。是我国の貿易が受身貿易の位置を脱せざるが為にして、居座り貿易の評あるも寔に止むを得ざる次第と云はざるべからず、然れども斯くの如きは決して貿易の本色にあらざるのみならず、実に我の為め深く遺憾とせざるを得ざるなり。苟も外国と通商を為し之を以て国運の進歩を謀らんと欲せば是非とも受身貿易の陋態を脱して働掛貿易の位置に進まざるべからず、即ち進取的貿易の位置に進まざるべからざるなり。然るに今韓国に至りて其貿易の状況を視察するに韓国に対して我は実に働掛の位置に立てり。是れ実に吾人の意を強する所にして国家の為め大に悦よろこふべきことなりとす。

資料①によれば、今まで日本は相手から買いたいものを相手が来て売のを待ち、相手に売りたいものを相手が来て買っていくのを待つという、受身の貿易であった。そして開港は通商のためというより、政治上より誘導されたものであった。明治 12、3 年ごろは不換紙幣増発のため、常に輸入超過であったが、その最たる綿布類の多額の輸入を国産に転換したことが、国内の紡績業の発達に繋がった。当時、日本の綿糸は多く仁川に輸出されたが、綿布はイギリス製が占めていた。しかし国産の紡績業の発達によって、日本製の綿布輸出量も倍増したとある。航海、鉄道も同様である。今や日本の対韓国の貿易は能動的に働きかけている状態であり、国家のために大いに喜ぶべき、としている。そして政治や外交ではない民間の通商によって国運の進歩を謀るために銀行を設立、そして今まさに鉄道の整備が不可欠であることを述べ、積極的な通商を推し進めようとした。それは次の釜山での演説でも示されるように、通商の積極推進こそが自他の利益と福祉の増進になることを強く確信している栄一自身の信念を語った内容であるといえよう。<sup>13</sup>

### 三、資料②「釜山に於ける渋沢栄一氏の演説の概要」

資料②は『日韓通商協会報告』第参拾五号に掲載されており、同じく明治 31 年 5 月、釜山に於いて、外交上の進化という点について自分の見解を述べたものである。その内容

幸に我國の朝鮮に対する現状を察するに正に是れ野より文に入りつつあり、否な殆ど將に其極度と云ふ迄には至らざれども相当の場合に進み居るなり。然るに我々御互の働作は如何と顧るに、果たして時勢相当の働作を為しつつあるか。残念ながら独立独歩、我は我として通商貿易の務めに従事し、能はざるかの如き恨みあらざるなきか、唯夫れ攻略侵撃に代りて吾人の使用すべき外交上の再利益たる通商と貿易とは如何に如何に應用せられ、將た奈何なる効果を収めつつあるか、斯處に列席せらるる武官并に外交のお方々は畢竟するに我々実業者の先鋒にあらずして、實に吾等の爲には後背に在りて援護の勞を採らるるに過ぎざるものなり。而るに却て武官や外交官が主となり我々実業者は後方より附託して漸く自家頭上の經營を為すが如きは我も人も共に甚だ遺憾の極みならずや、然り而して日韓の外交位置が前陳の如く粗ぼ文明的の程度に進みつつあるにも拘はらず、大に此の位置を利用して為すべき責任を有する我々実業家が働作の上に現れつつある効果は果たして円満なるか、否な文明に而も完全に其通商貿易が現今の位置、現今の境遇と相匹敵し相併進しつつあるかと云ふに恐らくは然らざるものに似たり、唯夫れ朝鮮と云はず我々実業界現時の情態は實に然り、決して諸君をのみ斯く言ふにあらず私も亦其圈内にあるが故に、一層の奮励を以て厭ふべき旧套を脱せんとの意志轉た切なるものあるを以て斯く申したる訳なり。

– 128 –



して、我々が奉じて立つべき商工業が発動せんとするの端緒なりとす、去ればとて輕  
 挙急進は餘り宜しからざる次第なるが、一体御当地は開港の歴史が久遠なる為か將た  
 社会力組織が尤も日本的に整頓し居る為か、仁川京城等に比較すれば至極平穩にして  
 物に競争せざるの風あり。誠に実業界の第一義として尊崇すべき沈者の趣きあり、然  
 れども、是も少しく中庸を失すれば稍や守舊的に偏するの嫌ひあり、進取の氣象に乏  
 しきの憾みあり、故に沈着摯実なる地方を占めて其目的に向て進行するは素より悪し  
 からざれども、或る場合に遭遇すれば撼天動地の一大活劇を為すべき事もあるべき  
 也。加ふるに世界の大勢は滔々として地を締め民を壓しつつあるなり。強は弱を制し  
 優者は遠慮なく劣者を倒しつつあるなり。苟も此大勢にして一朝侵入し来らんか江河  
 の決すると一般得て防ぐべくもあらざるなり。宜しく世界の機運に察し、宇内の大勢  
 に鑒みて相後れざるの工夫なかるべからず、斯る釜山の風景氣候及び釜山今日の情  
 況を何處迄も現在の儘に維持して永久諸君の独占に委し他人の剽睡を容れざらしめん  
 と欲するも到底為し能はざるの夢想也。

翻つて我邦の形成を一瞥するに恰も千八百七十五年の独逸と酷似せり。彼れ独逸は  
 仏国と戦ふてアルサス、ローレンスの一邦を収め將た多額の償金を得たりと雖も、其  
 終局を察するに却つて仏国の為に輸せられたる如き変態を生ずるに至れり。我邦も亦  
 然り清と戦ふて克勝の美名を得たりと雖も、戦後の経営未だ全く成らず且つ経済界は  
 彼か如きの境遇に在るにあらずや、去れども是は一時の減少にすぎざるべし、仮令ば  
 健康体の者が過度の食事を為して胃腸を損じたと一般にて一時は身体を害したるに  
 相違なきも、或る場合に及んでは之が却て他日の衛養となるも亦知る可らざるなり、  
 兎に角我邦今日の経済界は彼が如くなるも機運の宜しきに隨て漸次に恢復の道を図  
 り、着々整理の途に進ましめんには甚だしき憂慮を要せずして我々が希望する所の順  
 勢に帰着せんこと知るべき也。

却説朝鮮国に於ける貿易は他方に行はるる者と異にして大に末頼敷者あり、他方に  
 於いては我は常に受動的なるに独り当国に対しては主動的なり、然して我は其貿易の  
 派遣者たるの位置を占む、斯る好勢に立ちて貿易を営むものは僅に当国の一あるに過  
 ぎざるのみ、古人の言ふ寧ろ鶏口と為るも牛後となる勿れと、然り徒に他人の後へに  
 瞠着して齷齪たらんよりは進んで小局たりとも我れ自ら主人公となりて為すあるに若  
 かざるなり、我より万事に働き掛けて行くは大に我々の愉快とする所なり、然れども  
 我れ此れ如き好位置を占め居るが為に、大切な相手者を捉へて却て馬鹿にせんとす  
 るの氣味あり、是等は宜しく一日も速に洗滌せざる可からざるの悪弊にして我々実業  
 者が無二の弱点と云ふべきなり。若し此等の悪弊にして改めざらんには到底我の手足  
 を伸張し得ざるなり、誠に彼の英国を視よ、未開の地に入りては如何なる仕方の商業

をか為せる、野蛮の土に入りては如何なる植民をか為せる、その国の改良進歩を図るの点に於て熱心せるの半面には、又熱心に自国の利益を図りつつあるなり、蓋し彼我の福祉を進めんとするにあり、然らば東洋の英国否東洋の主権者として寧ろ世界商工業の中心を以て立つべき我々日本の実業家たるべき者は須らく並に一点の考慮なかる可からざるなり、殊に朝鮮は小なりと雖も一の独立帝国なり、地富み物饒に運輸の便亦頗る好く、現在と言はず将来と言はず共に是れ好望の佳邦なり、況や我は其主人公として否な他方に珍しくして僅に当国に在る所の商略、即ち我より働き掛けて万事を経営しつつあるに於いてをや、去れば我々は今後益々正道に依りて奮心する所あり、他の声援を恃まず我は我として好個の新生面を開き現今の好形勢を失はず現今の良順境を利用して武力以外若くは外交局面以外に於て大に為す所あらざる可からざるなり（下略）

以上は素より氏の検閲を経たる者にあらざれば言句の間自ら誤謬なきを保し難し主意は朝鮮時報に拠る。

自ら実業家として活躍してきた栄一にとって、武官や外交官に付託し、経営をようやう行うようなやり方は、「甚だ遺憾の極り」<sup>14</sup>であった。彼は日本の対朝鮮の貿易の主動的位置を大いに生かして、朝鮮の国の改良進歩を謀るとともに、自国の利益を図り、互いの福祉を進めることを述べている。一方で、対朝鮮の貿易に関して、実業家は主動的立場にあり、自ら主人公となりうる好位置にあるが故に、「大切な相手者を捉へて却て馬鹿にせんとする」ことがあり、これこそがいち早く払拭すべき悪弊とし、これを改めない限り将来の繁栄はないことを述べている。明治30年の「釜山港貿易の概況」<sup>15</sup>をみれば、対朝鮮の貿易相手は輸入、輸出ともに諸外国を抑えて日本が首位の立場にあった。このことを踏まえて、さらなる将来を見据えての言葉であったといえよう。つまり武力や外交以上に商工業の発展をその中心に据え、自国の利益と互いの福祉を進めることを提唱している。

#### 四、資料③「朝鮮経営苦心譚」

資料③は大正2年(1913)1月、朝鮮公論発刊の際に、朝鮮に関する意見を述べることになり、経済問題の中でも特に尽力した金融、運輸、工業鉱山の事業についての内容で、当時男爵だった渋沢自身の語りから始まっている。明治11年6月8日、<sup>16</sup>第一銀行が朝鮮に支店を置き、明治32年初めて朝鮮に於ける鉄道、京仁線を開業した。その内容は以下の通りである。

朝鮮公論の発刊に就て私に朝鮮に関する意見を述べよと言はるるに対して、わずかに記憶して居る所を御話ししましょう。併し私が御話するのは朝鮮に対する政治問題ではなくて単に経済問題であります。其の経済問題も範囲が狭くて先ず銀行業即ち、金融問題が主であります。それを根本として、続いて独り金融のみならず或いは運輸事業若しくは工業鉱山等に対して幾分の力を尽くした積りでありますから、此等の事を順序を追うて御話して見ませう。

### 第一銀行設立前後

先ず金融問題について述べますと第一銀行が朝鮮に支店を置いたのは明治十一年であります。また外交が発達して居らんで朝鮮の国際関係が将来如何なるかといふ事も私には判らないけれども、その前に征韓論議起り遂に其の説が敗れ寧ろ外襲といふ如き趣意は成るべく避けて、ただ国家の無事富実を計るといふのが当時の政府の方針であつた。其の結果遂に明治十年の国乱<sup>17</sup>を起こすに至つたのである。是れ蓋し世人の熟知する所であります。其れから確乎<sup>しつぷ</sup>とは覚えて居りませぬが、大久保利通氏の内務当局の時だつたと思ひます。第一銀行の為に何程かの金を貸さふということで十萬円計り安い利息で貸して貰いました。之れが朝鮮に支店を開く手始であつたと思ひます。但し銀行は其の補助が欲しい訳ではなかつたが結局意見が一致したのである。素より私には当時海外に就いて政治的の考えはなかつたが、只経済上より見て<sup>どう</sup>支那、朝鮮に対して日本の実業が発展し行き度いと深く思つて、兎に角、朝鮮に支店を出さう位の趣旨でありました。而して同時に支那にも支店を出さうとしたが、其の頃、大蔵省に雇はれて居つた英国人シャンドといふ人が銀行業として内地を専ら経営するならば海外の為替銀行といふものはせぬがよい、為替銀行をやるならば内地の預金は見合わせたがよい、内外共に経営する事は余程<sup>むづかし</sup>六ヶ敷い。殊に日本は銀貨国であるから為替銀行は別して困難である。海外銀行はよしだがよからうと書面を以て忠告されました。そこで私も大いに悟りて朝鮮<sup>だ</sup>丈けとして、支那は手を付くる事を見合わせ、爾来<sup>じらい</sup>第一銀行は海外には唯少々の取引を為すに止めて為替の事業は致しませぬ。ただ朝鮮はわずか海を隔てて居るばかりだから先ず手を付けたような事情です。而して其の際の業務としては、僅かの貿易に対して荷為替を付けてやり又は居留民に対して抵当貸しを為し預金を為す丈であつた。支店を言い出したのはプサンが一番先でその年号は覚えてないが、元山津仁川と、各地に手を延ばし、而して明治十六年頃でありました。<sup>18</sup> 支店所在地に於ける税関の出納事務を朝鮮政府より第一銀行が引き受けました。朝鮮人のみならば此<sup>このひきうけ</sup>引受も如何だつたか知れぬが当時朝鮮の海関税務の取扱は英国の「ロバートハート」が当時、支那の税関総長で其の乾兄<sup>こふん</sup>の「ブラウン」と云

ふ人が朝鮮の税務司<sup>ぜいむし</sup>という位置でありました。其の時分<sup>じぶん</sup>は支那の勢力が朝鮮には余程強かったから自然に英人が来て取扱うた訳であります。そこで此<sup>こ</sup>のブラウン氏が少々の金でも朝鮮人に取扱はせる事は困るといふので日本人の経営して居る第一銀行に頼んだ方が好いといふので朝鮮に於ける海関税の仕事をする事になったらしい。夫れから明治十五、十七年の兩年の朝鮮には政治上の騒動<sup>さうどう</sup>がありました。<sup>19</sup> 其の政治上の騒動は商業上に影響を及ぼして、十進めば、八つ退くという風で甚だしく発展力を阻害し、明治二十四、五年頃迄は年一年幾分か進むが、大体は同じ様になる取引を為すばかりであった。越えて明治二十七、八年の日清戦争は如何なることかと心配したが、戦争が略ぼ終局を告げて井上侯が朝鮮公使に成られた時に朝鮮の発展を計りたいというて第一銀行に再三電報せられ、二十五万円だったか、五十万円だったか朝鮮政府へ貸せと云って交渉の結果貸し上げた事がある。井上侯の性質としても何でも矢も鉄砲もたまらぬ程<sup>いきおい</sup>の勢で命令して来られたので、如何に侯と自分とが親しい間柄でも銀行の事は別だと云って当方も十分意見を主張した。後で笑ったこともあります。其れから間もなく井上侯が公使を辞され代って三浦梧楼氏<sup>みうらごろう</sup>来たり、王妃の騒動<sup>さうどう</sup><sup>20</sup> などがあって日本の施政に付いて朝鮮の感情を損じ、同時に種々他の国々から朝鮮に持込み来たった事がありまして、国王が他国の公使館に籠居する忤<sup>こ</sup>といふ変事も生じまして従来厚意を尽した日本が却って疎隔された様な有様でありました為に、日清戦後に伸びんとした事業が一向に進まなかった。

#### 鉄道敷設の苦心

是より先き暫定条約<sup>ざんていじょうやく</sup><sup>21</sup> と称へて鉄道敷設の事を日本と朝鮮政府との間に約束して、京釜鉄道及京仁鉄道を敷設することになったのでありますが、王妃の乱より人氣阻喪し、日本より進んでやる訳にも行かぬ故に実業家も如何ともする事も出来ない、中に京仁鉄道は米国の「モールス」氏の手に許可されました。そこで私<sup>わたし</sup> 等<sup>ら</sup> は甚だ残念に思つて同志申し合せて頻りに買収運動をしました。而も私は其の発起人の一人で大いに力を尽くしましたが、反対側の人は為に他国と衝突でも惹起<sup>じやつき</sup>するに至ってはならぬとの説が強くして、其前より京釜鉄道の敷設をも思ひ出しましたが、当時我が政府は充分に助力するに至らず、朝鮮に於ける我が国運の発展は遅々として各種の実業は妨礙され、銀行事業<sup>ぎんぎやう</sup> 等も種々の方面から恐喝されるやふな有様で如何なる事かと将来を氣遣ふ程でありました。明治三十年は大隈伯の外務大臣時代で伯は朝鮮の事業は成るべく政府より補助しようと云つて、飽までも積極的<sup>あく</sup>の説であつて遂に東京にて一のシンジケートを作り、米人「モールス」氏より京仁鉄道を買収し、<sup>22</sup> 後に之れを合資会社とし其の合資会社が爾後拮据<sup>じこききよ</sup>経営して敷設工事を励行し、明治三十二年始めて朝鮮



に於ける鉄道を開業しました。其の以前に曾て願った京釜鉄道の敷設も許可せられ、数年を経て京仁京釜両鉄道は合併する事になり、始めて終局したのであります。始め「モールス」より京仁鉄道を買収するに就いては政府から相当の補助をしようというので東京シンジゲートは其の出資額を定め私と益田瓜生の三人が世話しましたが、二ヶ年を経て三十三年に各開業しました。其の計業の為に私は朝鮮まで行きましたが、其頃から此の線路は相当の収入があったのであります。其の後漸次釜山の繁昌するに引替へ、仁川は衰微したと聞くから京仁鉄道の景況は今日も尚ほ満足であるか否かは判らんが、然し京城と仁川とは日本の東京、横浜の如く一国の首府に通ずる鉄道であるから、利益の多少に拘らず鉄道連絡を付けて置かねばなりません。其の鉄道が一時米人の手に帰したのが幸いに吾々の力で買収して今日は国有鉄道に相成って、相変わらず継続して居るのは喜ぶべきことであります。今日になっても私はその当時の事を考えると、誠に愉快に思うので、もしも当時政府も大いに力を添える事が出来ず、我々も奮発しなかったならば、我が政府は猶ほ一層高い代価を以って該鉄道を買収せねばならなかったと思ひます。又京釜鉄道は京仁よりは線路も長し二百万円以上もかかる大事業であったが、たぶん明治二十九年頃発起出願したけれども朝鮮政府は之を許可しない、三十一年頃故伊藤公が朝鮮に行かれた事がありましたが、侯爵は本来京釜鉄道の敷設は賛成ではなかったが、当時朝鮮の公使一林権助氏が大に此事に同情されて伊藤公の朝鮮訪問を機会に大いに運動して吾々の願いを許可させました。但し短期間に竣工すべき条件附で確か三十二年中に踏査工事を始めなければ権利は消滅すると云ふのであります。處が我が政府は容易に其事業を補助せられず、殊に二千万円以上の金額になると株式にしても容易に募集が出来ず、また募った處が利益に上がらねば引き続き株金を払い込ませる訳にも行かないから、一千万円を払込み他の一千万円余は社債にする見込みなりしも、政府が容易に其社債に補償してくれる模様はなし、彼此して居る中に認可期限は来る、踏査工事測量の費用もないという始末で、遂に大倉氏と私とが危険を犯して五万円の金を出して以て調査費に充てたが他日会社が成立して其の株金払込みにて返金となりました。右の株式を募集したのは当時の重役諸氏各自分担して頻りに各地を勧誘した結果漸く其募集が出来ましたが、夫れも小さな株で全く重役諸氏の丹精である。何でも株主の総人員が百万人以上であった。その後私は欧州旅行をしたがどうしても京釜鉄道資金としての外債の必要性を感じ、英国滞在中京釜鉄道の為に英吉利より一千五百万円を借りようと思って政府に電報で掛け合つて見たが、政府は之を承諾せず、終に外債も出来ず、帰朝後追々工事は進行するも其の払込金が十分に出来ぬと云ふので、三十六年には四百万円を日本銀行より融通してかろうじて工事をやって居る中に、段々と日露の関係が切迫して来て、

政府は早く京釜鐵道を作らねばならぬと云ふことになって、其の後は反対に政府から種々催促されるようになった。三十六年の冬から秋は病氣のため京釜鐵道を辞し、後は古市公威氏<sup>ふるいちこうせい</sup>が引き取り会社の予算金額より百数十万円余計にかけて速成工事を為して漸く三十七年に竣成し、日露戦争については鐵道としての本分<sup>ほんぶん</sup>を尽した。京釜鐵道の経過は今日でこそ一笑話とするが、当時の経営の困苦はなかなかのものでありました。尤も私は首脳に居ったからして苦勞も多く勤勉も十分尽くした積りでありますが、其の際共に従事した人々も亦色々<sup>くしん</sup>と苦心されたのであります。其れが為めに今日になりても一の手柄話<sup>てがらはなし</sup>として述べることを得るものと思ひます。一同刻苦丹精<sup>こくくたんせい</sup>して造り終せればこそ三十七年に鐵道の本能を發揮されたので、唯一時の營利觀念にあらざりし事は何處からも認識されると思います。此の鐵道について殊に裏面にありて親切に助力せられたのは桂公爵<sup>かつらこうしゃく</sup>で大いに謝意を表さねばならぬのであります。

#### 中央銀行の設立

却説<sup>さて</sup>、金融の事でありますが、是<sup>これ</sup>より先き露西亜人が露韓銀行を作ろうと云ふ計画もあって、日本の活動は為に稍殺<sup>ややころ</sup>されんかの形勢も見えたが、朝鮮との貿易関係のない露国が到底金融ばかりか其の関係を保つものでないから、事実開業に至らず、三十三年頃から段々我が勢力も恢復し、三十三年の冬私が朝鮮に行つて京仁鐵道を開業すると同時に金融<sup>かいくちやう</sup>の拡張を計りなどしたので幾分か人気を日本に<sup>ひるがえ</sup>纏<sup>か</sup>さしむる事が出来た。当時林、山座等の活動家が公使館に居て、朝鮮に対する外交も行き届いて来たから金融界も今少し力を入れろと云つて朝鮮政府へ度々金を貸すといふ問題が生じて来た。第一銀行も余りに大なる貸金は出来ないから我が政府から助力して貰ふことにしたが、政府も又之を励行する事も出来ず、為に第一銀行も其経営に苦しんだこともあったが、日を追うて業務も發展して朝鮮に紙幣を融通する事を試みに政府に願つて見たが容易に許可しないから、三十四年に至り政府に関係なく第一銀行が独力で紙幣発行を試みた處が、如何にも取引<sup>むつかし</sup>が六ヶ敷い。殊に日本の同業者連中にも嫌われて実に困難しましたが、日を経るに従つて第一銀行の信用も増加し、紙幣の融通も便なる所から稍々<sup>やや</sup>其融通高が拡張しかけると、仁川で二度も取り付けを受けて銀行は大いに苦しみました。が元来此の紙幣発行の為に利益を得ようとは思<sup>おもは</sup>なかつたから、始終正貨準備を十分に居った為め、取付の時には何等心配もなく正貨の交換を為したから、斯くなると信用も増し、取付も減り大いに金融の調和を与ふようになった。銀行は追々と京城に次いで元山津、釜山、仁川の外、鎮南浦、平壤等にも支店を出すようになり、朝鮮に於いて殆ど中央的金融経営を為すやうになったのは三十五六年頃であつたと思ふ。が固より未だ完全な中央銀行と迄は行かなかつた。日露戦争後

も三十八年に平和克服して政府より目加田氏が朝鮮政府の財政顧問官としてやって来て、財政整理と貨幣改革とを行ふには是非とも一の中央銀行を作らねばならないといふので、俄かに第一銀行をして其の任に当たれとの事であった。第一銀行では重役中にて種々熟議の上お引き受けしようといふ事になって先づ貨幣改草原資として、安い利息で金三百万円を朝鮮政府に貸し上げ、それから政府よりの預金と銀行よりの貸上金に対する条件を定め一方政府に収入すべき租税の取引扱方を引受け愈々中央銀行の任務をなす様になって四十一年迄経営しましたが、其の年の冬故伊藤公が統監として朝鮮に置かれて茲に始めて其の制度を改正せんと企てられ、第一銀行の支店で朝鮮の中央金庫を持つ事は面白くないから望むらくは銀行の本店を朝鮮に移しては如何だと相談がありましたが、私は第一銀行の当初より今日に至る迄の苦心を察せられながら、本店を移せ<sup>など</sup>杯といふそんな無理な事には服従は出来ませぬ、日本に建った銀行を朝鮮に移すような主客転倒の事は御免を蒙るとご返答をしました。夫れでは特殊の銀行を創立して夫れに引き継ぐやうにしてもいいかと云はれたからは、私は答えて「仕方ありません」といふのでとうとう第一銀行は中央銀行の方は手を引くようになりました。が私としては是も国家の為とならばと思つて、私利を第二に置いて毫も苦情<sup>など</sup>は言へぬのであります。そこで第一銀行の発行紙幣に対しては相当の償還方法を立て事務は一切、韓国銀行——今の朝鮮銀行に譲る事となり、一方我が第一銀行は別に其営業方法を立て、爾来<sup>じらい</sup>第一銀行支店は普通銀行に対する経営を為す事となりました。即ち内地対朝鮮の貿易上の為替事務を主として紙幣発行又は<sup>また</sup>国税取扱等の事務は<sup>すべて</sup>總て朝鮮銀行に引譲り、従つて釜山京城等を除き、他の支店は悉く皆朝鮮銀行に譲渡したのであります。是れ等<sup>ら</sup>の約束は四十一年から四十二年迄に二<sup>ねん</sup>ヶ年の間に取り運びて全く朝鮮銀行に引き渡したのであるが、事茲<sup>ことここ</sup>に至る迄は<sup>まで</sup>実に三十年の永い歳月を経ました。

## 其他産業の施設

前に述べた運搬金融の外に三十八年頃、私は朝鮮の土地の改良を<sup>はか</sup>図りたいと考へて、韓国興行会社を創設<sup>つく</sup>るに際し、私の姻戚の者が社長となり、私も其の相談相手になって居ります。之は朝鮮の生産力を増加し度いといふ事業で、鉄道の如く<sup>たんじつ</sup>短時日で成功するものではありません。元来朝鮮人は一年に一作で安んじて居りますが、之を改正して内地の様に二作にして朝鮮の地方を富ませやうと思ひますが、まだ一々思う様にも行かず、又私の手も届かねば致し方はありません。また朝鮮の生産業としては養蚕を改良しなければなりません。養蚕は日本よりも古いのであるが、桑が悪いから従つて生糸も悪い。また種<sup>しゅさんほう</sup>産法も不十分たらふし、種々の方面から之を改良しなけれ

ばなりませぬ。畢竟養蚕は桑樹が変して糸となるのである。恰も人の食物がよくなければ其の人の健康もよくないと同じ事で、第一桑の改良を図らねばならぬが、南鮮の釜山と馬山との間に三良津といふ處がある。洛東川に沿うて至極養蚕に適当して居る土地であるから、頻に奨励してやって居るが、まだ微々たるものである。兎に角、将来耕作の進歩養蚕の発達に努めようと考へて居る。興行会社も既に一万町歩余を持って居る。今之を売却するならば大分な利益になるだろうが、目前の利に拘泥せずして少々つつでも進んでいく事に勉めて居る朝鮮の生産力の充実といふ方面からして耕作物の改良は誠に必要の事であります。夫れから朝鮮には金鉱が多い、又砂金も沢山あるから、十数年前より浅野氏と共に技師を派遣して吟味した末、既に忠清道に稷山といふ金鉱の特許を得て三十五年頃から遣り掛けた處が、思ふ様に行かないで荏苒日時を送る中、一昨々年<sup>あめりか</sup>垂米利加人と合資経営にする協議が成立し、遂に米国の法律によって資本も半分ずつ出すと云ふことにして爾来稷山会社と云ふ名義で私は裏面に於いて相談相手になって経営しつつあります。会社の資本高は二百万円であるがまだ砂金に手は付けない。石金の方も相当の鉱脈があると云ふ事です。「スタンプ」と云ふ機械で鉱石を砕いたものを水に掛けて金を搾り取るといふ最新の方法で其のスタンプの基数を以て鉱山の大小を知ると云ふが、今日稷山金鉱では四十台を据え付けるやうになった。砂金は船の如き機械で砂金の含有する地層を掘鑿する筈だ、が此れも愈々調査が出来た上でやります。日米共同の事だから別に異論も物議も起らない。余り広大なる鉱山ともなりますまいが只管有望な事業と思はれます。其の他セメント工場を作るとか、甜菜にて製糖会社を作るとか種々な新事業計画もありますが、将来の事を斯ふなると予言する訳には行きませぬ。其れから水力利用に就ても嘗つて大同江及び漢江の上流で調査をして見ましたが、何分水力が乏しかった為<sup>ためほとん</sup>殆ど苦しんだ甲斐もなく、勞して功なしと云ふものであった。此れ等かの朝鮮に対する経営の大略であつて実に明治十一年より四十二年頃迄約二十年間の苦心談であります。

#### 政府の産業方針

最後に現在の総督府の政策に就いて一言を添へますが、今日の朝鮮は百事創業の際で一攫千金を企図するものが多いから、乱雑に流れ安い。是れを以て総督府で安心と認めなければ之を認許しないと云ふ許可制度である。が是れでは到底充分なる発達は覺束ない。総じて事業の進歩は成るべく簡易の方法によりて之を許可し、其の趨勢を甚だしき時に於いてこれを制裁し多少の弊害は寛恕するといふ政策を望みます。之に反して重箱の隅を楊枝で鑿るやうな措置は面白くない。如斯制度の布かれて以来は興るべき会社も自然と躊躇するやうになると思ふ。併し是れは私の主義主張で、之れか



ら先は議論になるから、<sup>こんにち</sup>今日は之を見合す事に致します。

「朝鮮経営苦心譚」では、第一銀行朝鮮支店、設立鉄道敷設、中央銀行の設立、農業改良、鉱山開発など、明治十一年より四十二年頃迄<sup>ころまで</sup>約二十年間の朝鮮経営での奮闘ぶりが、洪沢栄一自身の言葉で語られ、その苦勞と当時の国際情勢の様子が良く分かる内容となっている。当時の大蔵省に雇われていた英国人シャンドが洪沢の計画していた中国や朝鮮での銀行設立に反対したが、朝鮮だけという条件で釜山を皮切りに元山津、仁川と第一銀行を設立したこと、また朝鮮税務総長を引き受けていたのが英国人口バートハートであり、支那の税関総長の部下で朝鮮財務司であったブラウンが、朝鮮人に税務の取り扱いを任せすることを拒否したとある。つまり当時は中国での英国の勢力が朝鮮にまで及んでおり、その英国が、朝鮮政府をして、朝鮮に於ける海関税の仕事を、日本人経営の第一銀行に頼んだ経緯が明らかにされている。一方で、明治十五、十七年に壬午事変が起きたことで、其の騒動が商業上に大きな影響を及ぼしたとある。そして日清戦争後は親露派であった閔妃の変、高宗がロシア大使館に籠居したため、日本との関係は疎遠になり、事業も全く伸びなかったことが記されている。そのあおりをうけ、鉄道は京仁線が米国人モールスの手に許可されたが、後に洪沢はそれを買収し、明治三十二年初めて朝鮮に於ける鉄道を開通させ、かねてから許可の下りていた京釜線も合わせ敷設した。洪沢はかねてより通商を盛んにするための銀行や鉄道の重要性を認識しており、当時の快挙を愉快に感じていたといえよう。また鉱山などは最初はいくず、後に米国との合本経営を行ったことも記されている。その他、水力利用の為、大同江の上流調査を行ったが、水力が乏しく、労ばかりだったことなど、さまざまな苦勞譚が書かれており、非常に興味深い内容となっている。また洪沢が日本の銀行業務の指導を受けたシャンドに対し恩意を感じているにも関わらず、<sup>23</sup>その意に反し、強く朝鮮進出を試みたのには近代日本の積極的な通商を望んだからにはほかならない。それは資料②でも述べたように自国の利益はもちろん、自他の福祉を考えた上でのことである。そして朝鮮への「大切な相手者を捉へて却て馬鹿にせんとする」ことを改めない限り将来の繁栄はないことを述べており、洪沢の観察眼は鋭い。類似の言葉は、明治四三年（一九一〇）十二月の竜門雑誌の記事でも「從來内地人の彼等に対する態度を見るに、どうもすれば空威張を事とし、内地では碌でもない人間が、鳥なききの蝙蝠で彼らを人間扱いしなかった。斯くの如き調子は朝鮮開発に百害有って一利なきものだから宜しく改めるがいい」<sup>24</sup>と述べられている。また京仁線敷設工事の際には、かつて米人が工夫を足で蹴っていたのを見て、気の毒に思い、「朝鮮人を蹴ったり撲ったりしない様に。若し働かなければやめさしてよいから、日本人の真意ある処を知らせることが必要だ」<sup>25</sup>と指示をしている。したがって、洪沢は「朝鮮の民族主義を理解し受け止める



視覚を持ちえなかった」<sup>26</sup>わけではなく、むしろ朝鮮にとって日本がどのように映っているかを相当に意識していたといえよう。

## 五、資料④「征韓論々議の真実を語る」

資料④は、1939年発行の森田英亮編『あの事件の思出を語る』に収録されており、〈征韓論の主眼〉〈私は遣韓使節に大反対〉<sup>27</sup>の小見出しがついている。〈征韓論の主眼〉では、明治6年（1873）におこった征韓論が実際は「遣韓使節問題」であったことを述べ、渋沢自身、対外的火種の原因となりかねない「遣韓使節」を送ることに反対であり、「対外的問題の解決は、しばらく隠忍し」「内政第一主義で行くべき」と固く信じていた。その内容は以下のとおりである。

### 征韓論の主眼

征韓論に破れて、南州翁<sup>28</sup>以下の諸参議<sup>しよさんぎ</sup>が、野に下ったのは、明治六年十月末のことであった。私は、<sup>あたか</sup>恰も、此年五月、井上馨侯と共に、職を辞した為、直接、此の当時の閣議に関与しては居らない。

しかし、私も征韓論には、反対を熱唱した一人なるが故に、大体の事柄だけは、勿論承知して居る。

世間では、一口に征韓論の衝突と云って居るが、閣議では朝鮮を征伐するが為に、兵を起さうといふことが、問題となった次第ではない。「朝鮮討つべし」と云ふ過激の論議も行はれたに相違ないが、当面の議案となったのは、征韓問題に非ずして、遣韓使節問題である。すなわち武力は二の次として、できるならば、先ず、平和の中に、国交問題を解決しようといふのが、主眼になって居る。したがって、此の問題の中心人物である大西郷の精神も、ここにあった。一体韓国は、天正十八年より文化八年に至る迄、日本に來聘して居ったが、文化以後、六十余年、国交が中絶して居った。<sup>29</sup>ところで、王政維新と共に、旧国交を訂する為、特使を派し、国書を持参せしめた。文中、或は皇祖皇上といひ、或は皇室、奉勅といひ、従来の往復文書に見当たらず字句を用ひてあった。韓国ではそこへ云ひがかりをつけた。「日本は濫りに、我が国を属国扱ひにして居る、此の如き文書は、受け取ることが出来ぬ」これを勿ね付けたのが、事の起こりである。当時韓国政府にも、武断派と文知派とがあったが、文治派は、日本と修交をかさねるということについて、格別意義はなかったらしい。只武断派の牛耳をとる大院君が、日本と交際することは、やがて韓国を併呑される事にならうといふやうな妄想を抱き、国王をうごかして、一も二もなく、我が国書を斥けたと信すべき理由がある。これが明治元年三月のことで、以来我が外務当局と韓国政

府との間には、何回か交渉がかさねられたのだが、いつも先方は煮え切らない。

此の紛糾が、元年から六年迄、持ち越しになった。つひに此年に至って、頑迷なる韓国政府は排日運動を起こした。<sup>30</sup> 我が居留民に対しては、示威運動を試みるやら、糧食を絶つやらして、圧迫を為し、侮辱を加えたので、太政官の問題となった。悉く我が居留民を撤退せしむるか、それとも強力をもって韓廷に迫り、修好条約を締結せしむるか。二者、その一を選ばねばならぬ差し迫った立場となったのである。

其頃だいかく臺閣の参議は、西郷隆盛、板垣退助、大隈重信、大木喬任、江藤新平、後藤象二郎の六人、外に、太政大臣三條実美卿が居られて、これを総督されて居った。

出征論者の急先鋒は、板垣参議であった。

「我が良民を見殺しにするのは、政府として、忍びざる所である。よって、居留民保護のため、速やかに一個大隊の兵を釜山に派遣するがよい。これ恰も、英仏両国が居留民保護の名の下に軍隊を我が横浜に駐屯せしむると同一理由であって、日本の正当防衛である。修交談判の如きは、それから後のことである」

これに反対したのが西郷参議。

「それは不可いけない。彼が、何程、我国を侮りさげすんだからとて兵力を用いるのは、穏やかではない、彼の無礼を責むるには、他に自ら途がある、蓋し、今迄、日本から送った使節は、幾人か居るが、いづれも官等の低い官吏である。彼等をして、先方の地方官を相手に交渉してゐたところで、所詮この問題は、解決しさうもない。故に、此度は、責任ある要路の大官を派し、礼を厚く、辞を尽くし、正々堂々と、韓国に肉迫せしむべきである」此ういふ意見を述べた。すると三條公、

「大使を派遣するとせば、兵を率い、軍艦に乗って、行かねばなるまい」

口を挟んだ。

「左様なことを致しましては、益々穏やかでなく、此の場合、使節たるものは、一兵一卒と云へども、率いて行つては宜しくありません、礼冠礼衣し、誠心誠意、天地の正道を踏んで、彼の国の当路者と見えねばなりません」

西郷の提言は、閣議を左右し、板垣参議も、自己の意見を撤回した。

同時に此さいの際南州は彼みづ自から遣韓使節の大任を帯び、彼地へわたらんと附言した。蓋し、彼としては、密かに決する處があったと相見える。

折柄おりから、外務卿副島種臣が、此年七月末に帰朝した。卿は、遣韓使節問題に対して云った。「大使の任は、外務卿当局が、これに当たるべきが当然である」

西郷に此う反対して、建白書迄も差出した。

廟堂の形勢も、副島派遣に傾きかかったので、西郷は、一夜、副島の屋敷を訪問した。

「大使のことは、拙者に、任せて置いてもらひたい」

切に、副島を論破した為、副島もその熱意に動かされて、強ひて争いはなかった。

かくして、八月十七日の閣議となり、大勢は西郷の希望の如くに運んで大使任命の内定となった。三條公は、箱根の行在所にましました明治大帝に謁して、委曲を奏上した。

「西郷を遣韓大使に任ずるは差し支えないが、近く岩倉右府も帰朝する故、発表は、それ迄待つがよろしい」

此ういふ御<sup>おん</sup>諒<sup>おせ</sup>があったと洩<sup>もれ</sup>承<sup>うけたま</sup>はる。

その結果でもあろうか。遣韓大使の件は、内裁を経たに止まり、発表はされなかった。しかし西郷は非常な喜びあったことが、翌日、板垣にあてた書面によって見ても、推量<sup>はかりし</sup>することが出来る。

昨日は参<sup>さん</sup>上<sup>じょう</sup>仕<sup>つか</sup>候<sup>まつり</sup>處<sup>そうろう</sup>、御他出<sup>おたしゅつ</sup>にて御礼<sup>もうしあげず</sup>も不申<sup>かげ</sup>上、実に先生の御蔭<sup>かげ</sup>を以て決然たる心持始めて生じ申<sup>もうし</sup>候<sup>そうろう</sup>、病氣も頓に平癒、條公の御殿より先生の御宅迄、飛んで参<sup>まいり</sup>候<sup>そうろう</sup>仕合<sup>しあわせ</sup>、足も軽く覚え申<sup>もうし</sup>候<sup>そうろう</sup>もう横棒<sup>うれび</sup>の憂<sup>うれひ</sup>も有<sup>これある</sup>之間敷<sup>まじき</sup>、生涯<sup>しょうがい</sup>の愉快<sup>ゆかい</sup>此事<sup>このこと</sup>に御座<sup>ござ</sup>候<sup>そうろう</sup>。

西郷は、実に最初から死を決して此の任に当らうとした。

乃<sup>すなは</sup>ち韓国当路者が、西郷の言を聴くならば、即ちやむ。もし、聴かずして、彼自身が殺戮さるるならば、日本として、始めて征韓<sup>し</sup>の師を起こすべき名目が立つ。彼の死は、断じて犬死とはならぬと云ふのが、その真意である。いはば、和戦両様の覚悟があったと見て差支<sup>さしつかえ</sup>ないのである。

私は遣韓使節に大反対

けれども、私などは、遣韓使節には、大反対であった。

何故かと云ふに、明治政府は、維新の大業を完成したものの、僅かに内治に対する諸般設備<sup>しよはん</sup>が漸<sup>ようや</sup>くその緒<sup>ちよ</sup>についたに過ぎない。それとても、決して、実績をあげて居る訳ではない。廃藩置県は断行されたものの、未だその整理がついては居らない。のみならず、不平の士族は、所在に横議を逞しうして居る。よって、政府当路者としては、対内的施設の完備に全力を尽し、唯一尊念、国力の充実を計るべき重大な時機に臨んで居る。対外的問題の解決は、しばらく隠忍して居るのが当然、まして況んや、干戈をうごかして、韓国に兵を出すと云ふやうなことは、及びもつかない。何事も、内政第一主義で行くべきものだと、堅く信じてゐたのである。

又、私共とは違った意味で、頻りに反対を提唱した一味がいる。黒田了介（即ち清隆伯）などは、その一人。それは、外でもない、西郷にして、渡韓せんか、蒙昧の韓

人は必ず西郷を害するであらう、彼の如き棟梁の材をむざむざと犠牲にするは、国家の一大損失だと云ふに在る。これも亦、道理ある事であつた。

これより先、明治四年欧米派遣の岩倉大使に随伴したる大久保利通は、此年五月、一行に先んじて帰朝し、又、木戸孝允は、副島と前後して、帰朝した。さり乍ら、廟議の大勢は、西郷の意見をもってしても、つひに動かす可からざる状態にあった。

で快々として樂しまず、退いて、緘黙して居った。

そこへ、九月十三日、岩倉大使一行が帰朝したとは云へ、復命その他の事務に忙殺されて、居った為、内裁を経たる遣韓大使一條に対する閣議を開く機会がなく、のびのびになっていた。

「一時も早く確定するやうに ...」

征韓派の参議からは、三條公に向かつて頻に催促をした。

漸く、十月十四日になって、第一回の會議が召集された。この時、大久保、副島両卿が参議に任ぜられた為、席に列るべきものは、三條太政大臣、岩倉右大臣をはじめ、都合十一名である。

此中、征韓派は西郷、板垣、後藤、江藤、副島の五名、非征韓派は岩倉、大久保、木戸、大隈、大木の五名、議決は、多数によって定めらるるに非ずして、総理たる三條公が、取捨するのである。

此日は、木戸が病氣と称して出席しなかった。

岩倉公及大久保と西郷との間には、余程、はげしい舌戦が行はれたやうに聞いて居る。岩倉公も、大久保卿も、海外を巡遊して、帰朝したばかりの際、世界の大勢より推して、これに反対した。

「貴下が、大使として、朝鮮に赴くは、よろしい。さり乍ら韓人は必ず貴下を害するであらうによって、勢、兵を動かさねばならぬ事になる。その際、露国は、黙認しては居るまい。現に露国は、樺太に於いて、暴虐を縦して居る折柄である。此方の見るところでは、対韓問題は後の事にして、対露問題を先ず以て解決せねばならぬ」

これが岩倉公の意見。

「対外問題よりも対内問題が先である」

「只今内政を改革する為めに、新たに内務省設置の計画を立てて居る。此案の大体の編成は五十日程かかると思ふが、西郷君の渡韓問題は、其上にて賛成する」

大久保のとどの詰りの意見は其處にあった。

「いや事は迫る、一日も遅延すべきではない」

西郷は、頑として動かなかった。

双方、云ふ丈の事は云って、論戦に火花を散らした。三条公も、その日は、何とも

決定を与えずに解散した。だが、西郷は、もう云ふ事はないと、翌日十五日の閣議には、顔を見せなかった。

「もう云ふだけの事は云って<sup>しま</sup>了った、此處へ出席しても致方なし、自分の意見が行はれぬといふことなら、一身を退けるより途はない」

此う云って、辞職を<sup>ひらめ</sup>仄かした。

西郷は、近衛都督、陸軍大将、参議の要職に当たって、維新の功臣、陸軍の<sup>じゅうちん</sup>重鎮として、明治西部の一大柱石<sup>ちゅうせき</sup>である、斯人が突然、職を辞する事になると、その影響するところは、蓋し甚大である。三條岩倉両公の恐れたのは此の一点にある。その為か、十五日には、岩倉公も、余程、論鋒が鈍って、西郷の建策を採用することに決心した。

すると今度は大久保が聞かない。

「両公のみるところをもって、ご決定になったことに対しては、素より異存を申しあぐる筋のものでない、さり<sup>ながら</sup>乍、拙者の意見は、拙者の意見である。拙者は政見を異にする政府に、一日も<sup>とど</sup>留まることは出来ませぬ」

辞職を提言した。

大久保もまた政府の中心人物、西郷の意見を用ゐようとすれば、大久保が聞かず、大久保の意見に従えば、西郷が承知せず、両公も、<sup>しんたいりょうなん</sup>進退両難の窮地に立たれて、甚だ取捨に迷はれた。

だが、征韓派の主張は、勢、猛烈である。やむを得ず、三條公は、彼等の議に従って、<sup>ちよくさい</sup>勅裁を仰ぐ決心をされた。岩倉公を始め、大久保、木戸、大隈、大木等は、直ちに辞表を提出した。

危機は迫った。

十七日、又ぞろ最後の閣議を開いた。だが、岩倉公始め、非征韓派は一人も出席しなかった。

征韓派は、即刻、勅裁の手続きをとられたいと、三條公に進言した。けれども、三條公はこれを斥けた。

「<sup>いやしく</sup>苟も、国家重大事、本日は、岩倉右府、其他四参議<sup>けっせきちゅうゆえ</sup>欠席中故、明日、諸卿の出席<sup>わづら</sup>を煩はし、其の上にて聖鑑を仰ぐことに致したい」

「明日も欠席されたら如何いたされますか」

「<sup>だんこ</sup>断固たる處置をとる」

三條公は、此う<sup>めいげん</sup>明言された。それでも西郷は聞入れなかったが、一日の<sup>いぶ</sup>慰撫によって、やうやく<sup>しょうふく</sup>承服した。

此際、西郷は此う云ふ事をいふたと聞き及んでいる。



「天下のことは、一日一刻をもって決する場合があります、又一日一刻をもって誤まる場合があります、よって自分は、飽く迄、異議を申すのであるが、諸君がそれ程に云はるるならば、御同意申して、一日待ちます」

此の一言が図らずも、識を為した。

もし、西郷が、頑として、自己の主張を押通したならば、三條公も屈して、或は、さう云ふことに相成ったかも知れない。

此のたった一日の違いで、非征韓派は勝ったのである。

此う申すと、三條公に対しては、誠に御気の毒であるが、事實は、さういふ結果になって居る。即ち、三條公は、両派の間に介在されて、国家の為一方ならぬ労苦をなされた。上、陛下に対し奉り、下、万民に対して、いかに善處すべきかについて、いたく心痛された為め、十八日明方に、どっと病床につかれて、殆ど人事不省になられたと承はっている。

翌々日二十日、恐れ多くも、明治大帝は三條邸に成られて、親しく御慰問遊ばされた。御還幸の途すがら、更に岩倉邸に御立ち寄り遊ばされて、三條公にかはって、臨時に政務を摂理せよと、御下命に相成った。

翌々二十一日、岩倉公、廟堂に立つに及んで、公に声明された。

「三條公の見は、三條の見、此方には此方の見がある。必ずしも、前議を固執するいはれはない。両者の見を具さに申し上げて宸断<sup>しんだん</sup>を仰ぐのみ」

征韓派は承知しなかった。

「岩倉公が、反対意見を附して、奏上されるならば、吾々も亦意見のあるところを陳述して閣下に捧呈したほうが宜しい」

此ういふ意見が出た。だが西郷は首をふって聞入れなかった。

「左様なことを申し上げると、上陛下に対し奉り、一切の責任を転嫁し奉ることになり、甚だ恐懼の至りにたへぬ、自分等の意見を奏上することは、此際、差控へねばならぬ」

流石に南洲翁、ここが偉いところだとは私は、密かに敬服してゐる。

一時は、どうなることかと思った征韓論も、これが為、十月二十三日、正式に遣韓大使の義を止むるの旨のご沙汰があった。そして、西郷の辞意は、翌日聴許せられ、板垣、副島、江藤、後藤四参議も、続いて職を免ぜられたのである。(をはり)

日本は経済的理由によって、文化8年(1811)、第12回、家斉襲封祝賀の朝鮮通信使を対馬に差し止めし、その後は長らく往来がなかった。その一方で文久元年(1861)にロシアの対馬占領<sup>32</sup>が起こると、それと絡んで朝鮮経営のことが生じた。これは渋谷栄一の

『昔夢会筆記』にも次のように記されている。

三島<sup>33</sup> あれは露西亜が対馬を占領しまして、あの時分から聯絡した問題で、それに関聯して朝鮮経営といふ問題が起つたのです、あの時に対州の家老の大島友之允、あれが朝鮮征伐のことを言ひ出したのです、あれは山田方谷が策を授けたのだ<sup>34</sup>

対馬藩家老大島友之允は、文久3年（1863）5月12日、対馬防衛に対する援助要求嘆願書を提出、幕府に対して朝鮮進出を主張し、年々三万石支給と、武器・軍艦の貸与を要求した人物である。また山田方谷は、大島の願書作成の字句添削の協力をしており、対馬藩の朝鮮進出論提唱に大いに関与した。山田自身、清国が大乱で「中華一円無主の地」となって「取り勝」であるから、朝鮮台湾山東から攻め入るよう建議するなど、侵略性の強い誇大な対外進出論をたびたび主張していた。<sup>35</sup>

明治元年以来、何度か朝鮮宛ての日本からの国書がもたらされたが、「皇」「勅」といった字句を理由に交渉は決裂した。明治5年（1872）には8月外務大丞の花房義質と外務小記の森山茂を釜山に派遣、朝鮮の漂流民13名を朝鮮側に引き渡し、これまであった対馬藩との商売の上での負債なども政府が完全に支払ったが、同年10月以降、倭館は、朝鮮側から一切の日常生活用品の供給を絶たれ、書簡の往来も絶え、窮状に陥った。<sup>36</sup>そのため、遂には「悉く我が居留民を撤退せしむるか、それとも強力をもって韓廷に迫り、修好条約を締結せしむるか。二者、その一を選ばねばならぬ差し迫った立場」となったのである。しかし、渋沢はそのような状況下でも、まずは内政第一で行くべきであることを示唆した。これはフランスを始め欧州の産業文化を目の当たりし、必死で吸収しようとした渋沢にとって、日本はまだ発展途上であり、まずは国力を蓄える事こそが最重要課題であると判断したことによるものであろう。そして天皇に政治責任を転嫁させることを良しとせず、自分等の意見を奏上<sup>そうじょう</sup>することを控えた西郷のことを流石だと、称賛している。『青淵回顧録』に渋沢の西郷に対する人物評があり、「包容力に富んだ大度量と、不言の間に実行される果敢と、他人の為に自分の一身を顧みない同情心と義侠心と、其他色々な方面から大西郷を観察すれば、真に将たるの大器を備えて居った偉人であったことが思はれる」と回顧している。<sup>37</sup>

## 六、おわりに

以上、渋沢栄一の朝鮮に関する四つの資料について紹介をした。それによると明治初期の渋沢栄一の朝鮮に於いて、実業家として、いかに努力をして近代化の道を歩んできたか、よく分かる内容になっている。またその過程では米英露仏との軋轢を避け、深慮しな

がら朝鮮の銀行、鉄道などの市場発展に欠かせないインフラを整え、積極的な通商貿易を計ってきたといえよう。そして当時の列強諸国の弱肉強食の世界という限界を露呈しつつも、日本の対朝鮮の貿易の主動的位置を大いに生かして、武力や外交以上に商工業の発展をその中心に据え、朝鮮の国の改良進歩、自他の利益と福祉を進めることを考慮した点が伺えるのである。

一方、征韓論に関しては、それが世間で広く伝わる「征韓問題に非ずして、遣韓使節問題」であると明言し、天皇への政治責任の転嫁を防いだ西郷隆盛を称賛している。『渋沢栄一伝記資料』の内容によれば、「征韓」は文久元年（1861）のロシアの対馬占領にその端を発しており、対馬藩家老の文書作成に協力をした山田方谷の考えがその嚆矢であると同時に、日本を朝鮮経営へと駆り立てて行った一遠因であったことを示唆している。また当時の韓国が日本政府との交渉をなぜ拒絶したのかについては、攘夷思想、事大思想、八戸事件、など様々な推測<sup>38</sup>がされている。これらの問題と合わせ、特に、文化8年（1811）以後、六十余年、日朝国交が中絶したことから、対馬藩の経済的実情も考慮してさらに考察すると、渋沢栄一と朝鮮、それに付随する東アジアや列強との関係がより深く理解できるといえよう。

### 参考文献

渋沢栄一「朝鮮経営苦心譚」『朝鮮公論』1巻1号（朝鮮公論社、1913）

渋沢栄一「征韓論々議の真実を語る」森田英亮編『あの事件の思出を語る』（金星堂、1939）

西和田久学「仁川に於ける渋沢栄一氏の演説」『日韓通商協会報告』33（日韓通商協会、1898年5月）

西和田久学「釜山に於ける渋沢栄一氏の演説の概要」『日韓通商協会報告』35（日韓通商協会、1898年7月）

『渋沢栄一伝記資料』第十六巻（渋沢青淵記念財団竜門社、1957）

『渋沢栄一伝記資料』別巻第五 講演・談話（一）（渋沢栄一青淵記念財団竜門社、1968）

『渋沢栄一伝記資料』別巻第六 談話（二）（渋沢青淵記念財団竜門社、1969）

『渋沢栄一伝記資料』別巻第七（渋沢青淵記念財団竜門社、1969）

『渋沢栄一伝記資料』別巻第八 談話（四）・余録（渋沢青淵記念財団竜門社、1969）

『常設展示図録 渋沢資料館』（渋沢史料館、2000）

『渋沢栄一渡仏一五〇年 渋沢栄一パリ万国博覧会へ行く』（公益財団法人渋沢栄一記念財団 渋沢資料館、2017）

- 浅井智明・島袋尚也『日本の資本主義を作った男渋沢栄一 (TJMBOOK)』(宝島社、2019)
- 奥平武彦『朝鮮開国交渉始末 (京城帝国大学法学会叢刊 第1)』(刀江書院、1935)
- 鹿島茂『渋沢栄一 I 算盤篇』(文芸春秋、2011)
- 鹿島茂『渋沢栄一 II 論語篇』(文芸春秋、2011)
- 片桐庸夫「渋沢栄一と朝鮮 - その対朝鮮姿勢を中心として」『慶応の政治学 国際政治 - 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集』(慶應義塾法学部、2008)
- 片桐庸夫『民間交流のパイオニア・渋沢栄一の国民外交』(藤原書店、2013)
- 木村直也「元治元年大島友之允の朝鮮進出建白書について (上)」『史学』(三田史学会、1988)
- 坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』(日本経済評論社、2002)
- 末松保和『朝鮮研究文献目録 論文・記事編』東洋学文献センター叢刊影印版6 (汲古書院、1980)
- 田形 編・于臣 訳『渋沢栄一と中国 一九一四年の中国訪問』(不二出版、2016)

#### 参考 URL

デジタル版『渋沢栄一伝記資料』公益法人渋沢栄一記念財団 < <https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/> > (2020.5.20 取得)

- 
- <sup>1</sup> 渋沢青淵記念財団竜門社編纂『渋沢栄一伝記資料』全58巻、別冊全10巻(渋沢栄一伝記資料刊行会、1955-1971)。本稿の引用は一部を除きデジタル版『渋沢栄一伝記資料』(公益法人渋沢栄一記念財団)による。以下『渋沢栄一伝記資料』とする。
- <sup>2</sup> 『日本の資本主義を作った男渋沢栄一』TJmook 宝島社、2019 参照。なお渋沢栄一の名著『論語と算盤』は、各出版社から発行され、近年では漫画でも刊行されている。
- <sup>3</sup> 片桐庸夫「渋沢栄一と朝鮮 - その対朝鮮姿勢を中心として」『慶応の政治学 国際政治 - 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集』慶應義塾法学部、2008、120 頁。
- <sup>4</sup> 『渋沢栄一伝記資料』にみられる朝鮮関連の記事は今回挙げた資料①②の外、別巻第五に多く掲載されている。その中でも注目されるのは、明治33年(1900)の「於いて銀行倶楽部 銀行倶楽部晚餐会 韓国視察談」である。その冒頭で、韓国は「無学の国」とあるが、「その無学の国へ無学な者が往つたのだから」と続くことから、笑いを誘うための言葉であったと考えられる。また朝鮮を批判する市原盛宏君に対し、渋沢は常に朝鮮を弁護する立場で話を進めている。一方で、鉄道敷設と関連して、朝

鮮の人々が鉄道そのものに興味を抱かず、どうしてこういうものが出来るのか注意しないから物事が発達しない、是に関しては如何とも弁護し難い点を述べている。しかしこの内容だけで渋沢が「韓国の国民感情や民族主義について理解しようとする姿勢に欠ける」とは、判断できないだろう。片桐庸夫『民間交流のパイオニア・渋沢栄一の国民外交』藤原書店、2013、210、214 頁参照。概して渋沢の朝鮮に関する記事はかなりの量に及ぶが、それに対しての論稿は極めて少ない。著者は2019年8月に東京都北区の飛鳥山公園にある渋沢資料館を訪れたが、そこでは特に渋沢栄一と朝鮮に関する展示は見られなかった。したがって今回紹介する資料は、渋沢栄一と朝鮮の関係を知る上で貴重な役割を果たすであろう。

- <sup>5</sup> 『日韓通商協會報告』1～39号は明治28年9月から明治31年12月にかけて日韓通商協會から発行された雑誌であり、国立国会図書館にマイクロフィルム資料がある。資料①②の記録は該当する内容が『渋沢栄一伝記資料』別巻5巻28～32頁に「七 明治三十一年（五月十三・十四日）演説 於仁川」「八 明治三十一年（五月十五・十六日）演説 於釜山」と記載、収録されている。

- <sup>6</sup> 末松保和『朝鮮研究文献目録 論文・記事編』東洋学文献センター叢刊影印版6、汲古書院、1980、171、199 頁参照。

- <sup>7</sup> 地質学者。朝鮮の鉱山について数多くの著作がある。

- <sup>8</sup> 明治31年（1898）5月7日に韓国皇帝に謁した。渋谷栄一の渡韓は全3回であり以下の様に記録されている。

明治31年（1898）4月23日「是日栄一、東京ヲ発シテ韓国視察ノ途ニ上ル。五月七日京城ニ於テ韓国皇帝ニ謁シ、同月三十日帰京ス。」

明治33年（1900）10月30日「是日栄一、東京ヲ発シ韓国ニ赴キ、十一月十一日京城ニ於テ韓国皇帝ニ謁シ、帰途九州及び京阪地方ヲ視察シテ十二月十二日帰京ス。」

明治39年（1906）6月8日「是日栄一、東京ヲ発シテ韓国視察ノ途ニ上ル。二十八日京城ニ於テ韓国皇帝ニ謁シ、七月十八日帰京ス。」

参考 URL：『渋沢栄一伝記資料』「第2款 韓国行」<<https://www.shibusawa.or.jp/SH/denki/25.html#DK250001k>>（2002年6月5日取得）

- <sup>9</sup> 朝鮮新報社によって1906年から1908年にかけて仁川で発刊された日本語による新聞。参考 URL：国立国会図書館マイクロフィルム資料『朝鮮新報』<<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000056486-00>>（2020年6月5日取得）

- <sup>10</sup> 渋沢栄一の渡韓については以下の記録がある。『渋沢栄一伝記資料』第6巻431～434頁の『銀行通信録』第一五二号、明治三十一年七月一五日「渋沢栄一君朝鮮より帰朝に付招待会記事」「韓国見聞談（第二回の演説）」。参考 URL:< <https://eiichi>



shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/viewer.php?imgurl=060432> (2020 年 6 月 5 日取得)

11 送り仮名は引用文そのままにした。

12 読点を適宜句点にし、一部振り仮名を附し、俗字や旧漢字を新字体にしたのは筆者による。

13 この記事の次にある「商業 三十年仁川港輸入綿布及び紡績糸の商況」『日韓通商協会報告』33 号、3 頁を参照されたい。

14 「釜山に於ける渋沢栄一氏の演説の概要」2 頁参照。

15 「釜山に於ける渋沢栄一氏の演説の概要」の記事の次にある「商業 三十年中釜山港貿易の概況 第二章 外国貿易」『日韓通商協会報告』35 号、5 頁を参照されたい。

16 明治十一年六月八日に第一国立銀行の釜山支店を設置した詳細については『渋沢栄一伝記資料』参照。参考 URL : <<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/viewer.php?imgurl=160005>> (2020 年 5 月 20 日取得)

17 明治 10 年 (1877) の西南戦争をさす。

18 参考 URL : 『渋沢栄一伝記資料』第 16 巻「1 款 韓国ニ於ケル第一銀行」 <<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/index.php?cmd=read&page=16&word=%E9%89%84%E9%81%93>> (2020 年 6 月 5 日取得)

19 明治 15 年 (1882) 7 月 23 日の壬午事変をさす。1876 年に締結された日韓修好条約以降、改革派の閔氏政権が、攘夷派である興宣大院君を斥け、日本人教官を招聘して「別技軍」を新設したが、これに反発した旧式軍隊が俸給の遅配・不正支給を契機として暴動を起こした。官庁、日本公使館は襲撃を受け、朝鮮政府高官、日本人軍事顧問、日本公使館員、日本人語学生までもが殺害された。

参考 URL: <<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A3%AC%E5%8D%88%E8%BB%8D%E4%B9%B1>> (2020 年 5 月 18 日取得)

20 明治 28 年 (1895) 10 月 8 日に閔妃が殺害された乙未事変をさす。

21 明治 27 年 (1894) 8 月に締結された。

22 「モールズはその資本を米国に於て募集したが不成功であつたので、窃かに京釜鉄道の発起人渋沢栄一・大三輪長兵衛等にこれが売却方を申出た。依て渋沢は益田孝・瓜生震等の有志に謀り、政府当局者であつた大隈の賛成を得て、政府よりその資金の無利子貸附を得ることになり、既にモールズが多少敷設しか、つてゐたこの鉄道を二百五十万円で買収することにした」『世外井上公伝』井上馨侯伝記編纂会編 第四巻・第六七八・六七九、昭和九年五月刊『渋谷栄一伝記資料』第 16 巻 542 頁所収。

参考 URL : <<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/index>

php?DK160085k\_text> (2020 年 5 月 20 日取得)

- 23 「四四〇 竜門雑誌 第四八七号 昭和四年四月 新日本建設時代に於ける英国人の貢献 - パークス氏及びシャンド氏に就いて」四の内容の最後に、「私達はシャンド氏には公私共に指導を受けたので、日本の銀行業にとっては大いなる恩人であると申してよいと思っている」とある。『渋沢栄一伝記資料』別巻第八 談話 (四)・余録、渋沢青淵記念財団竜門社、1969、175 頁。シャンド (Alexander Allan Shand : 1844 ~ 1930) は日本のお雇い外国人である。
- 24 「九九 竜門雑誌 明治 43 年 12 月 朝鮮の開発に就いて」『渋沢栄一伝記資料』別巻第六 談話 (二)、渋沢青淵記念財団竜門社、1969、469 頁。
- 25 『渋沢栄一伝記資料』別巻第五 講演・談話 (一)、渋沢栄一青淵記念財団竜門社、531 頁。朝鮮での鉄道敷設に関する話は大正十五年十一月六日の「雨夜譚会 第二回」にもある。上掲書、367 頁。「東京経済雑誌 第四九卷第一二三〇号・第六八九 ~ 六九五頁 明治三七年四月一六日 朝鮮の鉄道 (上) (経済学協会に於いて演説) 男爵尾崎三良君演説」によれば、フランス人グローリーがロシアの公使を頼りに「頻りに運動して、京釜鉄道の敷設権を得むことを主張して居る、我々は之を聞いて甚だ憤慨に堪へぬ」とあり、当時の朝鮮情勢の不安定さが伺える。『渋沢栄一伝記資料』第 16 巻、渋沢青淵記念財団竜門社、1957、486 頁。
- 26 片桐庸夫、前掲論文、120 頁。渋沢が朝鮮に対して弁護をしつつも「旧慣にその日を送ると云ふのが彼の国の有様である」と指摘していることも事実ではある。しかし韓国民に対しては、その官吏からの収奪の酷さを指摘すると同時に、其の辞令の巧みさを述べている点ではむしろ鋭い観察力があるといえよう。「一二 明治三三年十二月八日 於大阪倶楽部大阪商業会議所会員招待会 韓国視察談」『渋沢栄一伝記資料』別巻五 講演 談話 (一)、渋沢青淵記念財団竜門社、1968、56 ~ 57 頁。片桐庸夫、前掲書、214 頁。
- 27 ここでは分かりやすく小見出しを山ガッコで示した。
- 28 西郷隆盛の号、南洲なんしゅうの誤植であろう。本文の最後の箇所には「南洲」とある。
- 29 広義の朝鮮通信使は室町期も含めるが、ここでは天正 18 年 (1590) から以降を言及している。江戸期の朝鮮通信使は第 1 回 (1607) から第 12 回 (1811) まで行われた。秀忠代には国交回復、捕虜返還に、家光代には捕虜返還から襲封祝賀へと変わり、誕生祝賀、日光東照宮落成祝賀も行われた。その後は「襲封祝賀」のみとなる。第 8 回、正徳元年 (1711) の折は新井白石の命で簡素化が指示され、最後となる第 12 回目の文化 8 年 (1811) は対馬に差し止められた。
- 30 対馬藩ではない日本政府が外交権を行使したことから、朝鮮は倭館への出入りを断

ち、必要物資の供給が途絶えたことをさす。

<sup>31</sup> 勅裁をさす。

<sup>32</sup> 文久元年2月3日（1861年3月14日）、ロシアの軍艦ボサドニック号は対馬に上陸し、造営物を建て、周囲を測量し、住民たちを殺害した。7月9日、幕府はイギリス艦隊の圧力によるロシア軍艦退去の提案を受け入れ、7月23日、イギリス軍艦2隻が対馬に回航し示威行動を行い、ロシア側に対して嚴重抗議した。形勢が不利と悟ったロシアの側は、文久元年8月15日（1861年9月19日）に、対馬から退去した。

<sup>33</sup> 三島中洲（1831～1919）は山田方谷の弟子で後に漢学塾の二松學舎を設立し、山田方谷から影響を受けて提唱した「義利合一論」は、二松學舎の三代舎長であった渋沢栄一の「道德・経済合一論」にも影響を与えた。夏目漱石も二松學舎において三島から学んでいる。「道德・経済合一論」については『渋沢栄一伝記資料』別巻第七、渋沢青淵記念財団竜門社、1969、518～519頁参照。

<sup>34</sup> 『渋沢栄一伝記資料』第47巻656頁。引用元は、渋沢栄一編「第十三 明法四十四年六月十四日兜町事務所に於て」『昔夢会筆記』下巻（大正四年四月刊）76～110頁による。

参 考 URL : <<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/viewer.php?imgurl=470657>>（2020年6月7日取得）

<sup>35</sup> 木村直也「元治元年大島友之允の朝鮮進出建白書について（上）」『史学』三田史学会、1988、116～117頁参照。『渋沢栄一伝記資料』第47巻、656頁には、「宗家は朝鮮と始終交易の約があつた、処が段々朝鮮が違約して、交易をしてくれぬのです、対州は交易で立つて居つた処が、それが無いから大に疲弊して、主人（板倉周防守）に就いて公辺へ御救ひ願ひに出たのです、処が今公辺も斯ういふ訳だから、逆も御救ひが出る訳にいかぬ、お前こゝで討つたらどうだと山田が勧めたのです」と記されており、征韓論がそこから出て来たことが記されている。しかし渋沢栄一自身は「どうも内の方が混雑だから、正直朝鮮などのことには力が及ばないのだ」という意見を述べている。

<sup>36</sup> 奥平武彦『朝鮮開国交渉始末』（京城帝国大学法学会叢刊 第1）刀江書院、1935、34、35頁。参考 URL: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1442603>（2020年6月取得）

<sup>37</sup> 鹿島茂『渋沢栄一 I 算盤篇』文芸春秋、2011、354頁。

<sup>38</sup> 奥平武彦、前掲書、40、41頁。